# 日本語スピーチ大会　―今後の可能性―

日本語教育部　　小川　誉子美
同　　中川　健司

## 1　スピーチ大会開催の経緯と再検討事項

これまで、日本語教育部では、2011 年より、3 回、全学の留学生を対象とした日本語スピーチ大会を開催してきた。外国人を対象とした日本語スピーチ大会は、自治体や民間団体によって各地で広く行われ、諸外国の文化や考え方を知る、他者の視点から日本を再発見する、地域住民の一人としての外国籍住民について理解を深めるといった目的で実施されることが多い。本学では、日本語を学んだ留学生が、自身の考えを日本語を通じて発信することと、留学生の視点を伝える機会を学内に提供することを目的に開催してきた。これまでの留学生センターの事業として実施してきた経験を踏まえ、本大会を、今後、国際戦略推進機構の事業の一つと位置付けるなら、どのような舵取りが必要なのか、方向性を定めるために必要な検討事項を以下に列挙する。

1）スピーチをする留学生にとっての利便性

非常に基本的なことであるが、スピーチ大会で想定される「聴き手」は誰なのかということを明確にする必要がある。聴き手が一般の日本人なのか、それとも本学の日本人学生なのか、または同じく日本語を学んでいる留学生なのか、それによってスピーチの内容も言葉遣いを含めた表現の仕方も変わってくる。これまではその点が曖昧なままスピーチを行っていたという反省がある。また、応募の時期と適切な準備時間の設定が必要である。現行は、10 月実施に向けて、応募の締め切りと 7 月としているため、募集とスピーチ大会本番の間に夏休みを挟むことになってしまい、学生のモティベーションの維持やスピーチ指導が難しくなっている面がある。また、このスケジュールだと、1 学期間のみ滞在する短期留学生、10 月に来日し、9 月に帰国する短期留学生は事実上参加できなくなっている。

2）日本語担当教員、大学関係者、学外者はどう関わるか

公平性維持のために教員による原稿チェックには制限を設けている。また、審査員には、日本語担当教員は参加せず、大学関係者、OB、学外者にお願いしてきているが、今後は学生や会場の視点を取り入れることも考えられる。また、企画や運営についても、かつて経営学部で行われていたように、学生がイニシアチブをとることで、大会の在り方も変わる。

3）賞の在り方

大会によっては、スポンサーからの高額の賞品を渡すこともあるようだが、本大会では、大学や OB の寄付による卓上品、文具、センターからの品を中心に賞品とし

てきた。

４）登壇者の範囲（参加資格）

これまで毎回聴衆として卒業生を迎えている。ホームカミングディでの実施を継続する場合、登壇者として、これまでのように現役生に限るのではなく、卒業生の参加も考えられる。諸外国にいる卒業生や会場に来られない者にも機会を拡大する方法として、サテライトやネットの活用も選択肢の一つとなろう。サテライト等を活用すれば、諸外国の卒業生が、審査員として参加することも可能になる。

５）日本人学生、観客の動員はどうするか

後述するように、本学の日本人の学生はスピーチ大会の最大の受益者たりうる。しかし、日本人学生の動員はもっとも困難な課題である。学生にとっては、毎日大学に来ている学期中のウイークディが参加しやすいとも思われるが、授業時間との兼ね合いがあり、十分な時間を確保するのは容易ではない。

６）国際戦略推進機構の事業としての位置づけ

従来の留学生センターではなく、機構の事業として位置づける場合、他言語、他部門と別の事業をあわせた共同開催など、本大会のより有意義な活用の方向について、機構内での議論が望まれる。

## ２　今後の可能性　利点と課題

こうした検討課題を踏まえ、新たな方向性として利点、課題も含め、次のものが考えられる。

１）サテライトを使った協定校参加型大会

スピーチ大会をインターネットを通じて中継するという試みは、既にトルコ、エジプト、モロッコ等海外の日本語教育機関で行われている。本学でもサテライト教室等の設備を利用すれば、海外の協定校へスピーチ大会の内容を配信することは可能であろう。本学で行われているスピーチ大会をただ見てもらうのではなく、協定校の学生にも特別プログラムとしてスピーチをしてもらう等、この機会をうまく活用できれば、本学への留学前、または留学後の協定校の学生にとって日本語学習へ向けた新たな動機づけとなるだろう。また、協定校へのSVを経験、または予定したりしている本学の日本人学生がスピーカーへの質疑応答を行うなど、スピーチ大会に参加することにより、大学間のみならず学生間のネットワークの強化に貢献できるのではないだろうか。

２）授業の一環としての、日本人学生によるスピーチ大会の運営

現在のスピーチ大会は、主催する留学生センターの教員が運営にあたっているが、もし日本人学生が主催するという形になれば、新しい視点でのスピーチ大会を開催することができる上、留学生ともより積極的な交流が期待できる。この場合、日本人学生が個人で運営に参加するというのは現実的ではなく、受け皿となる団体、または授業との協力のもとに運営を行う必要があるだろう。

３）外国語スピーチ大会を同時開催

本学では、日本人学生が英語や初修外国語を学んでいるが、学生対象の外国語スピーチ大会は行われておらず、本学日本人学生の外国語習得の成果を外部に対して披露する場は限られている。留学生対象の日本語スピーチ大会と日本人学生対象の外国語スピーチ大会を合わせた形で開催できれば、本学の国際化を外部に対して周知する場となりえる。その場合、日本語スピーチ大会と外国語スピーチ大会では観客の層が必ずしも重ならないため、どのような形で見せるかが課題となる。

４）日本人学生による投票

先に述べたように、スピーチ大会の目的として「外からの視点を日本人が学ぶ」、「諸外国の文化や人々の考えを知る」といったことが挙げられるが、その意味で、本学の日本人の学生はスピーチ大会の最大の受益者たりうる。しかし、残念ながら、日本人学生のスピーチ大会への参加はそれほどないのが現状である。日本人学生の関与を高める一つの方策として、日本人学生による投票が考えられる。

５）地域の国際交流団体との共催

日本語スピーチ大会は、自治体や民間団体では広く行われているが、神奈川県においてもそれは同様である。民間団体で行われているスピーチ大会の参加者は、留学生だけでなく、その地域に在住する外国籍住民全体が対象となっているため、より多様なスピーチが期待できる。本学も共催という形でそこに加わり、本学留学生がその中でスピーチを行うことにより、国際交流を通じた地域貢献が可能になると考えられる。

「YNU 日本語スピーチ大会 2011~2013」の報告は、留学生センターのホームページに掲載している。http://www.isc.ynu.ac.jp/about/index.html